

推理小説を読むことがある。や  
っと犯人が分かりそうなページ  
までめくるが、そんな時に限つ  
て地方の高校生の群れがどかど  
かと電車に乗り込んでくる。  
彼や彼女らはよくしゃべる。  
「ああ、俺も高校時代はこんな  
感じだったのか」と耳を傾ける。

り懐かし停車場の」という和歌  
がある。あの感じである。「次  
は〇〇駅ですか」とぶしつけに  
質問をする。「はい、〇〇駅で  
すよ」と標準語の答えが返つて  
くる。方言と標準語を相手によ  
って使い分けるのである。テレ  
ビの影響があるのかもしれない

「お上りさん、いらっしやい」  
の笑いであった。しばらくは言  
葉をしゃべるのが怖かった。  
故郷の同級生と渋谷のハチ公  
前で待ち合わせたことがあつ  
た。渋谷のハチ公像と有楽町駅  
は待ち合わせの定番であつた。  
友人と2人で喫茶店へ入つた。

感は計り知れない。  
東北から来た大学の友人が  
「東京駅に着いたか、上野駅に  
着いたかで東京のイメージはま  
ったく違つ」と言った。表玄関  
と裏玄関の違いを言いたかつた  
のか。いまは東北からの電車も  
東京駅着らしい。どんなにいい  
地方都市でも最初に会つた人間  
が良くないと、その地方都市の  
イメージは違ってくる。

## 土地の言葉に喜ぶ

地方都市でタクシーに乗る。

たわいない会話である。わたし  
が知らない歌手の歌の話題やテ  
レビの話題である。この会話が

わたしが東京に出て来た頃は  
標準語を使うのに往生した。東  
京駅に迎えに来た人が「荷物を

席を見つけた友人は「ここがい  
いだよ」と大声で言った。「こ  
こがいいよ」を間違えたのであ  
る。逆に、その土地を徹底的に  
悪く言うタクシーの運転手もい  
る。「あの男は」と市長の悪口

タクシーの運転手はその地方都  
市を褒めてくれると嬉しくな  
る。逆に、その土地を徹底的に  
悪く言うタクシーの運転手もい  
る。「あの男は」と市長の悪口

仕事柄、よく地方都市から招  
かれたり、訪れたりする。ポスト  
ンバッグひとつを持って、地方  
都市へ向かう電車に乗る。わた  
しは車中で読書をするのが苦手  
である。集中できない。それでも

土地の言葉でしゃべってけれ  
ば、それだけで嬉しくなつてし  
まう。「この土地は、まだ大丈  
夫だ」と嬉しくなる。

持ちましようか」と言ってくれ  
た。それに「よかです」と答え  
ると、周囲の人がどっと笑つた  
。人は、人の間違いを笑いの  
ネタにする。笑われた人の屈辱

から始まり、名物料理を食わせ  
る老舗の料理店の悪口まで言  
う。  
(松浦市出身)

石川啄木に「ふるさとのなま

のである。好意的な笑いだった。

ネタにする。笑われた人の屈辱

う。  
(松浦市出身)